

Team チームの動き

江田島湾のかき現存量の変動把握！ 海底への負荷軽減方策検討へ

かき養殖適正化研究チーム

江田島湾は筏の出入りが非常に多い漁場で、5～8月に湾外から多くの筏が移動してきますが、10～3月の筏数は夏の半以下に減少します。この頻繁な筏の移動がかきの現存量をわかりにくくしています。これまでの調査から、湾内のかき現存量の変動がわかってきました。チームでは、これをもとに海底への負荷の周年変動を推定し、その結果から効果的な負荷軽減について検討する予定です。



江田島湾のかき漁場（平成 20 年 5 月 20 日撮影）

新しい養殖カゴを求めて

一粒かき養殖研究チーム

冷え込みが厳しさを増すとともにかきも美味しくなり、新聞やテレビ等でかきの話題も数多く取上げられ、かきにとって最も華々しい季節の到来です。

1月4日には、一粒かきに関するテレビ放送がありましたが、早速多方面から問い合わせがあったり、一粒かき養殖用カゴの試作品の提供を受けたり、一粒かきへの関心の高さを感じます。

チームは、正月明け早々に最終試験を開始しましたが、折からの冷え込みから一粒かきの成長も今ひとつで、急遽屋内試験を開始するなど最後の最後まで粘っています。



試験養殖中の
かき種苗

カサゴ飼育で、低塩分飼育法と配合飼料の検討

地付き魚生産チーム

地付き魚生産チームでは現在、カサゴの種苗生産技術開発に取り組んでいます。カサゴは卵胎生魚で冬から春にかけて2～3回産卵するため、当センターでは12～1月に雌の成熟状況を確認しながら、適宜海面生簀より取り上げて産卵させています。昨年度までの研究から、仔魚期特有の大量減耗（産卵後20日目後に発生）に対して低塩分飼育が有効であり、体表に分布する塩類細胞の分布密度の変化と関連していることが明らかとなりました。今年度は量産規模における低塩分飼育法の検討と新たに配合飼料の適正な給餌方法の検討を行い、カサゴ種苗生産の安定化および低コスト化をめざして研究を進めています。

カサゴ産仔魚



卵巣内で孵化している
カサゴ仔魚
（光っているのが眼）

蓄養・輸送技術の高度化による 計画的な漁獲物の出荷を目指して！

蓄養技術開発研究チーム

チームでは昨年度から取組んできた事前研究（本格研究へ移る準備のための研究）の成果をもとに、来年度の県の新規開発研究に新しい課題を提案し、採択されました。

課題名は「地付魚（メバル、オニオコゼなど）の蓄養技術の高度化と効率的な活魚輸送技術の開発～新鮮で、おいしい魚を消費者に～」で、来年度から3年間、技術開発に取り組むこととなります。

これまでよりも「消費者への販売」ということを強く意識した取組みにしたいと考えております。そのため皆様から様々な漁獲や販売に関する情報をいただいたり、試験的な蓄養などにご協力いただくことも多くなるかとは思いますが、皆様に使っていただける技術開発を目指して取組んでいきたいと考えていますのでよろしくお願いいたします。



個別包装による
宅配式活魚輸送

今年のおニオコゼ放流追跡調査 ～ 1年経過した標識放流魚を再捕 ～

地付き魚資源増殖チーム

平成19年度は、放流後2週間までのおニオコゼ稚魚の動向を調査しましたが、今年度は放流後3ヶ月までの動向について調査しました。平成20年11月11日、昨年度と同じ江田島市鹿川湾の藻場に接した砂泥域に背鰭棘除去標識を施した全長40mmと60mmサイズの稚魚（各々3,800尾ずつ）を同時放流しました。

11月の放流後から2月にかけて放流点を中心に周辺海域を小型の調査用底びき網（ソリネット）や底びき網漁船で試験操業をした結果、放流点近くの定点から高率に放流魚が再捕されました。また、全長15cmに成長した昨年度放流魚（写真）も再捕され、稚魚の放流海域への定着性を確認することができました。

今年度放流群についてはまだ再捕数も少なく、調査途中ですが、今後の調査で放流された稚魚がどのような場所で生き残って成長していくのか、その生態を明らかにして、おニオコゼの放流技術を確立していきたいと考えています。



上：無標識魚

下：H21.1.27 再捕された19年放流魚
(←右腹鰭切除標識)

トピックス

平成20年度の一般公開を開催！

11月9日（日）水産海洋技術センターで、「広島のを、みて、ふれて、味わおう！」とのキャッチフレーズで、一般公開を開催しました。来場者は950人で、この内約半数が音戸町からの参加でした。魚のこどもや餌となるプランクトンを観察するコーナー、生きているサメやコウイカなどにふれるコーナー、餌やりコーナー、そして新しく魚のダシを味わうコーナーなどを設けました。来場者にダシの味を比較していただき、鯛やかきなどの海産素材のおいしさを再認識されていました。



味のヒミツコーナー

平成20年度研究発表会 開催！

2月6日（金）、平成20年度水産海洋技術センター研究発表会を鯉城会館（広島市）で開催しました。「医薬品に頼らない生物餌料の減菌技術の開発」、「低塩分飼育によるキジハタの種苗生産技術開発について」、「太田川における天然遡上アユ回復の可能性について」、「広島県におけるエドワジエラ・イクタルリ感染症の現状と原因菌の特性について」の4課題が発表され、活発な質疑が交わされました。各発表の要約は、次回の水技だより（No.15）でお届けします。



設備利用のお知らせ

水産海洋技術センターには、顕微鏡や各種の分析装置など、県民の皆さんに広く公開している利用可能な設備機器があります。利用制度は今年度から始まったばかりで、有料ですが、常時使用しない機器を購入しなくても済むことから、種苗生産者や企業からの利用申請があります。

水産海洋技術センターが公開している利用可能な設備機器として、次のような特徴があげられます。

- ① 干潟水槽など海洋環境実験設備！
- ② 共焦点レーザー顕微鏡、軟X線撮影装置、フローサイトメーターを総合研究所で唯一保有！
- ③ 遺伝子分析や魚病の迅速診断に必要な機器が充実している！

水産海洋技術センターの整備事業に伴い新しく導入された機器も多く、全国でも最新の機器がそろっています。

公開している保有機器・利用の相談については、技術支援部までご連絡ください。保有機器の概要を示した一覧は、県ホームページ、総合技術研究所のページから閲覧できます。

保有機器一覧：<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/www/contents/1219382862295/files/kiki004.pdf>

設備利用申請書（様式）：http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soumu/bunsho/kenhouki/reiki_honbun/word/013920021.doc